私はこう考える

「子どもは元気」がいいのか？

子どもの元気を再考する
―「子どもらしさ」というイメージの中で―

磯部裕子

はじめに

膨大な歴史的資料を基に「子ども」が近代の産物であることを示したフランスの歴史家フィリップ・アリエス（Ph.Aries）の『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活―』は、われわれの子どもへのまなざしの「あたりまえ」を問い直す衝撃的な書である。本書の歴史書としての評価は、その後の研究者たちの議論に譲るとしても、われわれの子どもへのまなざしと心性は、決して普遍的なものではなく、社会の変化とりわけ「学校」という教育機関の誕生とともに変化したというアリエスの指摘は、子どもを対象として教育実践するわれわれに、極めて意味ある示唆を与えるものであったといえる。

近代教育の対象としての子どもは、「無垢」「純粋」「善」……という子どものイメージの中で、子どもにふさわしい保護と教育を受け、大人とは異なる存在として位置付けられてきた。おそらく、本特集が再考を試みようとしている子どもの「元気」もまた、この近代の子どものイメージの延長線上にあるものと思われる。教育者がこれらの子

どものイメージを自明視し、「あたりまえ」としてとらえたままであるならば、そこには近代教育が突き進んできた「あたりまえ」の教育の世界が広がるだけである。

われわれが、本当の子どもの「今ここ」に寄り添おうとする時、子どものイメージの「あたりまえ」をどう受け止めていけばいいのか、若干の考察を述べてみたい。

「元気な子」というイメージの中で

園児募集用の幼稚園、保育園のパンフレット、今ではあたりまえになった各園のホームページ等で、満面の笑顔の子どもと広場を走り回る元気な子どもの姿をよく目にする。制作者は、こうした子どもの姿から、良き「子どもらしさ」を描こうとしているに違いない。

確かに、こうした子どもの姿は、見る者をも笑顔にし、元気を与え、安堵さえ与える。それは、そうした子どもの姿が、われわれが抱く子どものイメージそのものであるからである。われわれは、こうした子どものイメージをいつの間にか、普遍的なものであるかのように思い描き、そのイメージの子どもを良き姿、つまり「子どもらしさ」としてとらえてきた。

われわれが、子どもの良き姿としての「子どもらしさ」に囚われる時、教育は「子どもらしさ」に向かうベクトルのみを持ち、「一定のモデルに従った大人へと成長させるための社会的装置」[注1]として機能することになる。アリエスの指摘は、まさにこうした囚われの身のわれわれに警鐘を鳴らすものであったともいえる。

「元気な子」というイメージもまた、同様である。われわれがこのイメージに囚われれば囚われるほど、われわれは、必死で「元気な子」をつくり出したくなるからである。

ある時、園庭のすみっこで、Aちゃんが一人で砂をいじって遊んでいた。その様子に私を含め複数の保育者が気付いていた。その日、たまたま保育に参加していた実習生のBさんもまたAちゃんの姿に気がついた。Bさんは、とっさにAちゃんのそばに駆け寄り、声をかけ、盛んに遊びに誘おうとする。結果として、Aちゃんが、友達と共に鬼ごっこに参加した。その姿を見て「元気に遊べるようになってよかった!」とBさんは自身のかかわりを振り返った。

保育者C先生は、Aちゃんの様子には気付いていたが、Aちゃんの「今」を遠くから見守っていた。保育終了後、C先生は、Aちゃんにとって、あの時間を大切にすることに意味があり、Aちゃん自身が他の遊びに入るまでに時間がかかったとしても、それを待つことが必要だと考えていた、と自身の思いを語った。

その後の議論の中で、実習生Bさんは、Aちゃんが一人で静かに遊ぶことよりも、みんなで元気に遊ぶことが子どもにとって意味のあることだと思っていたこと、そのために、保育者は、子どもを遊びに誘うことが大事なかかわりであると考えていたことが話された。

実習生Bさんのかかわりや思いは、新任のころの保育者であれば、誰もが一度は経験したことがあるものである。もちろん、この場面においても、Bさんのかかわりがまったく望ましいものではなかったとは言い切れない。

しかし、われわれは、保育者C先生のように、Aちゃんの「今ここ」に対するかかわりは一つではないこと、そして「今ここ」を本当に大事にするということは、保育者の描く子どもの姿に早急に引き上げていくことではないことを知っている。「子どもの元気」を子どもの良き姿としてイメージすれば、そこに何としても近づけ、引き上げよ

うとする保育者の力学が働く。しかし、保育という実践は、それを目指すものではない。

保育という実践は、子どもと子どもの「あいだ」、保育者と子どもの「あいだ」に起こる物語であり、そこにいる者同士の「今ここ」に呼応して生成する「できごと」であるからである。[注2]

「今ここ」を生きる実践へ

近代教育が、一定の役割を終えた今、われわれは新たな教育を模索すべきところにいる。「一定のモデル」に従った「子どもらしい子ども」を教育する実践から、子どもと共に「今ここ」を生き、子どもとわれわれの「あいだ」にあるアクチュアリティーとしての実践への転換こそが、今、目指されている。

それは、子どものイメージに囚われたままのわれわれから一歩抜け出すことから始めるしかない。「元気なこどもの姿」――確かに、それもまたある日の子どもの一つの姿であることには間違いはない。しかし、それは彼のすべてではなく、また目指すべき姿でもない。

かつて信じて疑わなかった右肩上がりの発達観を見直し、大人が描いたイメージ（時にそれは、大人に都合のいい子）の中の子どもをつくり出すという教育から、子どもの丸ごとを受け入れ、子どもと共に「今ここ」を生きようとする実践へ――その転換の先に新しい時代の教育実践があるのではないだろうか。

（宮城学院女子大学）

注

1　本田和子『子ども一〇〇年のエポック―「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで―』フレーベル館　二〇〇〇年　p.18

2　磯部裕子・山内紀幸『ナラティヴとしての保育学』萌文書林　二〇〇七年　p.180